

建築を社会へ拓く多彩な評論活動による建築界への貢献

松 山 巖 殿

松山巖氏は、東京芸術大学美術学部建築学科を卒業後、空間工房設立（1970年4月）に参加、設計活動を試行模索する。そして、元倉眞琴、井出建らと「コンペイトウ」グループを結成、デザイン・サーヴェイを展開しながら、『都市住宅』誌、『TAU』誌などに拠って執筆活動を開始する。その後、松山・井出設計機構を経て、文筆活動に専念、『乱歩と東京—1920年都市の貌』（1984年）で、評論家として本格デビューする。翌年「日本推理作家協会賞」を受賞、それ以降、一貫して、作家活動を続けてきている。その執筆活動は実に旺盛である。

建築分野において、大学教員などの職につかず自立して評論活動を続けることは極めて困難であり、それ自体、建築ジャーナリズムの閉鎖性、脆弱性とされてきた。そうした中で、同氏は、建築を学んだ作家として、自立して持続的に評論活動を展開してきたほとんど唯一の存在である。その点を第一に、日本建築学会文化賞に相応しいものとして最大限に評価したい。

処女評論集『乱歩と東京—1920年都市の貌』は、江戸川乱歩の推理小説と東京という都市のあり方の関係を鋭く読み解き、当時の東京改造ブームに警鐘をならすものとして高く評価されたが、当初からその評論活動は「建築評論」あるいは「建築ジャーナリズム」の、ひいては「建築界」の狭い枠組みにとどまるものではなく、それらを広く社会に拓くものとして注目を集め、評価を得てきた。その水準の高さは、サントリー学芸賞（『うわさの遠近法』、1994年）伊藤整文学賞（『闇のなかの石』、1996年）、読売文学賞評論（『群衆 機械のなかの難民』、1997年）といった受賞歴が示している。数ある賞のなかでもいづれも権威がある有数の賞であり、その作家活動が建築の世界を広く日本の文化戦線に位置づける役割を担ってきたことをはっきり示すものである。

同氏は、生まれ育った東京港区愛宕に現在も住み続けている。虎ノ門、新橋界隈が同氏のホームグラウンドである。既に高層ビルに周囲を取り囲まれ、さらに再開発の圧力が強くなりつつある中で、風前の灯とも思える木造アパートを拠点に、30年近く執筆活動を続けてきた。全ての執筆活動は、その生活拠点をめぐって起きてきたこと、考えてきたことをベースに展開されてきているように思われる。『闇のなかの石』は言ってみれば自伝であり、当然、愛宕周辺が舞台となる。童話『ラクちゃん』は、愛宕周辺で起きた奇想天外の事件が主題である。敗戦の年に生まれた同氏は、戦後日本の、とりわけ東京の変貌を見続けてきたのであり、その変貌の動因を鋭く指摘し続けてきているのである。そうした意味では、全ての作品が都市論であり、建築論であるといっている。

その作家としての文章力、構成力には、生半可な建築評論家、建築家の到底及ばないものがある。『日光』『猫風船』といった創作作品にはめくるめくような想像力の飛翔がある。こうした才能に恵まれ、しかも建築の世界を熟知した作家の存在は、建築界にとってはかけがえなく貴重である。また、『世紀末の一年 一九〇〇年＝大日本帝国』のように、徹底した文献調査を基にしていることで、アカデミックな著作としても評価が高

いものが少なくない。さらに、徹底した現地取材をもとにすることで定評がある。

同氏の活動は、実にエネルギーであり、またユニークであり、日本の建築界にとって極めて貴重なものである。とりわけ、都市再生、地域再生が叫ばれ、また建築のあり方が根底的に問われる現在、その腰の据わった眼と評論活動は日本建築学会文化賞にふさわしい業績である。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。